

〈論文〉

地域の「危機言語」としてのモンゴル語 ——内モンゴル自治区フレイ旗樹林子村における モンゴル語の使用状況——

アルタンホァール

Mongolian as a “Language in Danger” of Area: The Situation of Using Mongolian in Shulinzi Village, Huree Region, Inner Mongolia Autonomous

Altanhuar

This report analyzed the present conditions of the Mongolian language life that grasped by a field work from the viewpoint of education and home and social life about the situation of using Mongolian that faced the crisis in Shulinzi Village, Huree Region, Inner Mongolia Autonomous.

As a result, Mongolian in the Shulinzi Village is maintained virtually only by a colloquial expression. Among the young people of the village, persons who understand Mongolian language and persons talking in Mongolian language are decreasing. It was thereby proved that Mongolian in the Shulinzi Village faced a crisis of continuation.

はじめに

内モンゴル自治区のフレイ旗*1では漢人植民の入植状況の違いにより、モンゴル語の使用状況が大きく異なっている。特に、漢人植民が多い西南部と西部の地域において、モンゴル人たちが漢語を第一言語にし、漢語で学校教育を受けている。それによりモンゴル語は消滅しているか、あるいは

熟年層が話すことによってかろうじて維持されている。2015年9月、筆者はフレイ旗西南部の扣河子(クーヘーズ)鎮と西部の樹林子(シューリンズ)村で現地調査を行い、これらの地域におけるモンゴル語の使用状況の実態を把握することができた。その結果、扣河子鎮ではモンゴル語の「漢化」や漢人が「民族成分」*2を「漢族」から

*1-「旗」は内モンゴル自治区の行政単位名称で、「盟」の下位単位である。モンゴル語でホショーという。また、「鎮」という単位は旗政府、県政府の所在地及び人口2万前後以上で、そのうち非農業人口が10%以上または2千人以上のソムやシャンに設置が認められる(吉田順一 2007a)。「村」は漢人居住地を指す行政名称で、モンゴル人居住地の「ガチャー」に相当する。本稿ではモンゴル人と漢人の雑居地を示す場合「ガチャー・村」と併記する。「村」の上位単位はシャン(郷)で、モンゴル語のソムと同格である。

*2-「民族成分」とは、戸籍登記に記入する国家が正式に認定した民族名称のことである。中国で1970年代から実行された「計画生育」(産児制限)政策がフレイ旗では80年代から厳格に実施されたため、漢人が自己申告で自分の民族籍を「モンゴル民族」に登録したことが指摘されている。

「モンゴル族」に切り替え、「モンゴル族」に登録したことにより、モンゴル語が理解できるモンゴル人がほとんどいないことが判明された。そのため、扣河子鎮ではモンゴル語が事実上消滅したと言える。それに対し、樹林子村では40歳以上のモンゴル人たちはモンゴル語で読み書きができる人は少ないが、話すこと自体はできる。しかし、若者と子どもの多くが漢人の学校に通い、漢語を第一言語にしているため、モンゴル語で話すことさえできなくなっている。このように樹林子村におけるモンゴル語は数少ないモンゴル人が話すことにより、日常生活の話しことばとして維持されているのが現状である。

このような状態が続けば、モンゴル語を理解し、モンゴル語で話せる人がさらに減少し、樹林子村においてもモンゴル語の維持が危機に直面し、いつかは扣河子鎮のようにモンゴル語がこの地域から消えるであろう。

現在、樹林子村のモンゴル人たちが日常生活の中でいかにモンゴル語を使用し、樹林子村でモンゴル語がどのように維持されているか。また、この村で子どもの学校教育の選択はどうなっているか、モンゴル人のモンゴル語に対する意識はどうであるか。本稿は、内モンゴル自治区フレイ旗の樹林子村において存続の危機に直面しているモンゴル語の使用状況について、現地調査により把握したモンゴル人の言語生活の現状を主に教育、家庭と社会生活の観点から分析するものである。

1. 樹林子村の概況

1-1. 村の歴史と名称の由来

樹林子村は1665年に成立したハルハ左翼旗に管轄されていた。ハルハ左翼旗は、東部はホルチン、南部はタンゴード・ハルハ、西部はナイマン、

北部はジャロードに隣接し、中華人民共和国成立後のフレイ旗の六家子鎮、平安シャン（郷）、水泉シャン（郷）、扣河子鎮とマンハン・ソムの全地域を管轄していた。住民の生活様式は純粋な遊牧生活であった*3。清朝雍正、乾隆年代に「借地養民」政策などが実施されたため入植して来た漢人植民が農業を営み、また、旗の王子が南部の牧草地を漢人植民に賃貸して開墾させたため農業が盛んになった*4。このような状況により、モンゴル人の遊牧生活の空間が狭くなり、モンゴル人も漢人植民に農業の技術を学び、簡単な農業を営むようになった。それに伴い、モンゴル人の生活も定住化し、遊牧生活様式が半農半牧様式に変わった。更に、社会的矛盾、自然災害、漢人との雑居を嫌がるなどの困難に遭い、モンゴル人が北部へ流民として行かざるを得なかったと考えられる。このような社会背景により、ヤンシム（養畜牧）河より南が漢人集住地域となり、河より北が数少ないモンゴル人の集住地域となった。

1935年3月にハルハ左翼旗がフレイ旗の管轄となり、南北二つのノタグ（区）に分けられた。南部はフーヘン（keüken）・ノタグ（現在の扣河子鎮の葦子溝）であり、北部はノヨンホロー（noyan qoriy-a）・ノタグである。ノヨンホロー・ノタグの行政の中心地は現在の樹林子村であった。そのため、樹林子村にノヨンホローという地名が付けられていた。その後、中華人民共和国成立により「王子」ということばが使われなくなり、榆の木が多く生えていたことにより「林のあるところ」という意味でショゴイト（siyuitu）と命名されたが、1980年代からショゴイトの漢語訳「樹林子」が定着してきた。

樹林子は1984年に「樹林子村」に変えられ、「村」としてこの一つの村が管轄された*5。

*3一本稿でいう「生活様式」とはモンゴル人居住地域での地域的拡がりに共通してみられる暮らしの型で、具体的には「遊牧」「牧畜」と「半農半牧」を生業とする生活スタイルを指す。

*4一巴・蘇和（2013）、82～84頁。



図1 六家子鎮

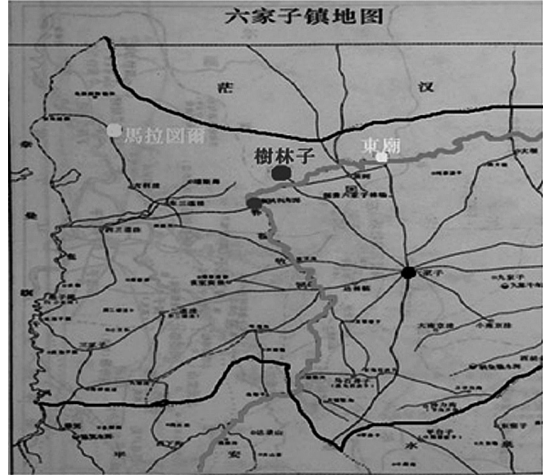


図2 六家子鎮の北部の3つの混合ガチャー・村

(地図1を Tianfeng & Kürelša, 2013, 図2を巴・蘇和 2013 に基づき筆者が作成)

1-2. 地理的環境

六家子（リュージュアーズ）鎮はフレイ旗の西部に位置し、この鎮には24のガチャーが属している。その中で3つのガチャー・村がモンゴル人と漢人の混合ガチャー・村である。その3つのガチャー・村はドンミョー（東廟）ガチャー、マルトール（馬拉図爾）ガチャー、樹林子村である。地理的には六家子鎮の北部、ヤンシム河の北岸、六家子鎮とマンハン・ソムの境界に位置している。

樹林子村はフレイ鎮より西北45キロメートルであるモホルゴー・ダムに面して北部に位置し、左右にドンミョー・ガチャーとマルトール・ガチャーがある。その位置を図1、図2に示す。

樹林子村は地理的にヤンシム河の北岸の砂沼区にあるモホルゴー（muqur yuu）ダムに面した肥沃な土地に位置し、農業に適している。そのため、干ばつの年も降水量が多い年も収穫できる。住民の生活は半農半牧生活様式であるが、農業生活をする人が比較的多い。樹林子村の面積は33096ム

ー（畝）（3276504 m²）で*6、耕地面積が6374ムー、牧草地面積が4500ムーを占める。

1-3. 生活様式と風習

樹林子村の人口は180世帯からなる約800人である。その中で23世帯からなる95人がモンゴル人で、総人口の約12%を占めている。生活様式は半農半牧であるため、漢人とモンゴル人の違いを外見から判断することは難しい。そればかりでなく、日常生活で使っていることばからもモンゴル人と漢人の違いの判断は難しい。ただ、モンゴル族であるかどうかを確認したい場合、本人たちの答えや彼らにモンゴル人の食文化、生活の風習などが若干残っていることから、彼らがモンゴル人であることが分かる。

この村の農地は村の決まりで一人当たり8ムーであり、牧業はモンゴル人と漢人の区別なく営まれている。2016年8月現在、村全体に牛が約600頭、羊とヤギが約2200頭いる。この村では羊と

*5—ハルハ左翼は王子府を行政の中心にし、王子府を現在の樹林子村においた。王子府をモンゴル語で noyan qoriy-a（ノヨンホロー）という。ノタグ（区）とは中華人民共和国建国当時使用されていた行政単位で、ソムと同格である（Tienfeng, Kürelša 2013, 168頁）。

*6—「畝」は地積単位で、1畝＝約99.17 m²である。

ヤギを飼っている家庭がそれほど多くなく、そのほとんどが牛を飼っている。その中で少ない方が3~5頭、多い方が10~20頭の牛を飼っている。牛や羊を飼うのは収入を増やすためであり、昔のように食材としての肉や乳製品を作る目的で家畜をもっている人はほとんどいない。このように、この村のモンゴル人の多くはチャガン・イデー(乳製品)を好むが、家庭でチャガン・イデーを作っている人は少ない。現在、村のモンゴル人の中でチャガン・イデーを自家製にしているのは一軒だけである。

近年は中国経済の発展に伴い、商業も発展し、生活がますます便利になってきたため、モンゴル人も伝統的なチャガン・イデーを家庭で作らず、食べたい時に購入するようになってきている。これは、様々な理由によるものである。これに対し、漢人は日常生活でチャガン・イデーを食べない、または食べ慣れない人が多い。このような食文化の違いがモンゴル人と漢人の生活習慣の違いを示す重要なポイントである。

チャガン・イデーを作っている村人の銀花(40代)は、「チャガン・イデーは私たちがずっと食べてきたもので、家族みんなが大好きで、自分で作るのが趣味でもあり、自家製は安全でおいしい」と話していた。村では、「もし自家製のチャガン・イデーが食べたいなら銀さんの家に行けば食べられる」と、モンゴル人たちが話していた。

樹林子村におけるモンゴル人と漢人の生活習慣の違いは外部の人に対する態度にも見られた。村のモンゴル人たちは外からの客に対して親切である。自分の家を訪れる人は知らない人でも出迎えて丁寧に挨拶し、家に入るとお茶を出し、帰る時も送り出す。これに対し、漢人の多くは外部の人にはまず、「どこから、何のため来ているか」と要件を確認してから家に入らせる。

また、この村ではモンゴル人が両親、夫婦、子

どもの三世代で一緒に暮らしている人が多いのに対し、漢人の場合はそれが少ない。

2. 樹林子村におけるモンゴル語の現状

2-1. 教育におけるモンゴル語

前述したように、樹林子村ではモンゴル語の教育が行われていないため、モンゴル語が数少ない話者たちの話ことばのみによって維持されている。なぜ、この村ではモンゴル人たちがモンゴル語で学校教育を受けることができなかったのか。筆者はこの問題に関心をもち、その調査にはまず樹林子村の学校教育の歴史に関する書物や情報を得ることが必要であった。筆者はまずフレイ旗の学校、学校教育、民族教育に関する歴史的資料や書物の中から樹林子村の教育に関連する資料を調べたが、この村の学校教育についての記述を得ることは困難であった。そのため、村の小学校に教師として勤めていた3人の元教員たちを訪ね、樹林子小学校に関する情報を得ることができた。その一人がこの村に住む包貴新氏(68歳)で、その話によれば、彼は樹林子小学校が成立した1957年に小学校に入学し、漢語で授業を受けていた。二年生の時にモンゴル人の教師が来てモンゴル語を教えはじめたが、数日ほどでその教員が移動させられたようであった。その後包貴新氏は小学校卒業までこの村の学校に通ったが、ずっと漢語で授業を受けていた。そして、1975~1983年までの8年間、樹林子小学校で教師として勤めたが、その間この村にはモンゴル語による教育は行われなかった。

しかし、1985年から樹林子小学校にモンゴル語のクラスが設けられ、一人のモンゴル人教師が生徒を集め、1日に1~2講時(1講時40分)ほどモンゴル語の授業を行っていた。ただ、教科書はなかった。生徒たちがモンゴル語の授業を受けるのは自由で、漢人の生徒も受けることができたが、モンゴル人ですらそのモンゴル語の授業を受ける

人が少なかった。同じく、この村の小学校で教師として勤めていたサラングレル氏（60歳）の話によれば、この村の小学校ではその後もモンゴル語の授業が1988年まで続いたが、1990年から完全に漢語で教えるように決められた。

しかし、1998年には村の小学校から3～5学年の生徒がいなくなり、次第に、2001年には1～2の学年が、そして、2005年には「学前班」（予備クラス）がそれぞれなくなった。そのため、現在、樹林子村には学校がない。漢語で教育を受ける学校に入る子どもも六家子鎮にある漢族の小、中学校に通っている。いうまでもなく彼らはそこでモンゴル語の教育を受けていない。一方、2016年2月現在、この村からモンゴル民族の学校に通っているのはただ1人で、彼女は村より東北に約40キロ離れたマンハン・ソムの小学校に通っている。

このように、樹林子村のモンゴル人たちが学校教育においてモンゴル語を学ぶ機会がなかったため、現在、この村にはモンゴル語が話せる人はいるが、モンゴル語の読み書きができる人はほとんどいない。

2-2. 家庭と社会生活におけるモンゴル語

樹林子村ではモンゴル人の人口が少なく、また、村の中でもモンゴル人の家が隣りあって生活している場合が少ないため、日常生活の中で互いにモンゴル語で話す機会が少ない。しかし、この村では、モンゴル人の妻が隣接するガチャーや村から嫁いできたモンゴル人である場合が多いため、その家族が年に数回ほど妻の親戚と交流することがある。これがこの村のモンゴル人にとって、家庭外でモンゴル語と接触する数少ない機会になる。

そういう意味で現在まで維持されてきたモンゴル語にとって、家庭内の話ことばは欠かせない存

在であった。このように重要な役割を果たしてきた家庭内のモンゴル語は誰によって話されてきたのか。親が子どもにどこで、どのようにモンゴル語を教えているのか、このような状況を知るため、2016年2月、筆者は樹林子村のモンゴル人たちの間で聞き取り調査を行った。

樹林子村のモンゴル人の中で、3世代で一緒に生活している家庭が9世帯ある。このような家庭内でモンゴル語は第一世代と第二世代の間でよく使用されている。彼らの多くは漢語で学校教育を受けているが、その当時、彼らは村にあった学校に通っていたため、家庭内でモンゴル語を使用する環境から遠く離れず、学校に通いながらも家庭内でモンゴル語を話し続けてきた。これに対し、フレー旗での学校統合の決定^{*7}により、2005年に樹林子村の小学校がなくなったため、子どもたちは家庭内でモンゴル語を使用する環境から離れて学校の寮に住むようになっている。そのため、日常生活で使われる話ことばも漢語になっている。

それにより、モンゴル語で話すことさえできない第3世代の若者や子どもたちが増えている。こういうことを憂慮し、子どもたちをモンゴル民族学校へ通わせたかった家庭もあったが、モンゴル族の学校が村から遠く離れ、また、交通が不便であったなどの理由で実現できなかったという。さらに、村の漢語受講の学校もなくなったため、子どもたちが家庭内でモンゴル語を使用する環境からも長期的に離れ、ほぼ漢語の環境で育つようになっていく。

そのため、子どもたちが家族との交流によりモンゴル語が覚えられるように、学校の休みなどに家族と一緒にいる場合は日常生活の中で親から子どもにモンゴル語で話しかけ、子どもたちが村を離れて学校に行っている時は電話をかけるなど、モンゴル語で話す工夫をしている親もいる。

*7—2000年に決定された「庫倫旗農村牧区完全小学校布局調整方案」に従う学校統合である（宝音孟和 2015, 89頁）。



図3 草原書屋の看板



図4 草原書屋の本棚

(図3, 図4はいずれも2016年8月筆者撮影)

これに対し、子どもたちにモンゴル語を教えることを特に考えず、子どもたちがどの言語を話そうと、どの言語で教育を受けようと、出世さえすればそれでよいと考える親も少なからずいる。特に、子どもの母親が漢人である家庭は、家庭内の会話がすべて漢語で行われている。この村ではこのような家庭の状況などにより、子どもたちのモンゴル語を学ぶ言語的環境が悪化しているのが現状である。

2014年から、村には「文化室」として「草原書屋」が設置された(図3, 図4)。係員の話によれば、この「文化室」は村民の文化生活のために政府から設置された施設であった。2016年8月現在、この「文化室」に本が約1000冊あるが、すべて漢語の本である。その理由はモンゴル語で読める人がほとんどいないため、政府が漢語の本のみを提供した。本の種類は小説、物語、辞典、生活に関わる知識、技術、科学などに関連するものであった。インターネットと携帯電話が普及した現在、これらの本を読む人は少ないが、チンギス・ハーンの世界史や水滸伝、三国志演義、紅樓夢などを借りて読む年配の人もあるようである。

3. 樹林子村における現地調査と結果

3-1. 樹林子村での現地調査の意義・研究方法

前述したように、フレイ旗では漢人植民が多い

西南部と西部の地域ではモンゴル人たちが漢語を使い、これに対し、北部では半牧半農生活様式に変わっているのにも関わらず、南部の農耕化した地帯に比べ、漢人農民の数が少なく、モンゴル語とモンゴル人の伝統文化が比較的よく保たれている。

樹林子村は歴史的に王子府によって建設された地域であったこと、肥沃な土地であることから旗の農業のために必要とされる漢人が次々と入植した。そのように入ってきた漢人たちは数年後には小作者になり、入植する漢人植民が次第に増えた。また、清朝時代に「借地養民」政策などが実施されたため、山東省、河北省から多くの漢人移民が樹林子村に入植し、ヤンシム河より南は漢人居住地域となった。これに対し、河より北部のモンゴル人居住地域では、1891年に発生した漢人入植者たちによる暴動である「金丹道」の影響により、ハルハ左翼旗の多くのモンゴル人が北部の砂漠地域に、あるいは遠く離れたアルホルチン旗やダルハン旗地帯へ避難した。ハルハ左翼旗にモンゴル人が減った理由としては、漢人との雑居を嫌って移動したことや自然災害のために移動されたこと、または、伝染病によって大量に死亡したことなどが挙げられる*8。その結果、民国初期にハルハ左翼旗ザサグに管轄されていた北部の18の村におけるモンゴル人の数は1000人に至らな

かった。

2016年2月現在、フレー旗六家子鎮のモンゴル人と漢人の三つの混合ガチャー・村におけるモンゴル人人口はそれぞれ、ドゥンミョー・ガチャーが約550人、マルツール・ガチャーが約140人、樹林子村が95人である。このように、六家子鎮の中ではモンゴル人がもっとも少ないのが樹林子村である。

樹林子村に生まれ育ったモンゴル人の中にモンゴル語で教育を受けた人がごくわずかだが、モンゴル語の読み書きができる人がほとんどいないが^{*9}、モンゴル語が話せる人も半数に満たない。そのうえ、近隣の村から嫁いできた女性たちがモンゴル語教育を受けたとしても漢語で教育を受けている子どもたちに教えられるのはモンゴル語の話しことばだけである。そのため、この村でモンゴル語は数少ない話者の日常生活での話しことばだけになっている。

しかし、このような危機に直面しているモンゴル語とモンゴル語話者についての研究はまれである。例えば、樹林子村に隣接するドゥンミョー・ガチャーとマルツール・ガチャーを対象に、家庭内のモンゴル語の使用状況や視聴するテレビやラジオの言語別の選択、子供の教育に対する態度などについてアンケート調査を行った研究はある^{*10}が、モンゴル人がもっとも少ない樹林子村におけるモンゴル語の使用状況についての研究はまだ見られない。この村のモンゴル人たちがモンゴル語をどのように使用し、また、モンゴル語がこの村でどのように維持されているか、それを明らかにすることはフレー旗におけるモンゴル語とモンゴル文化が存続するうえで重要な課題である。

以上のような事情で、樹林子村のモンゴル人の言語生活に関する先行研究などによる資料がないため、現地で調査を行うことが必要であった。そこで現地に赴き、モンゴル語が話せる村人を中心に聞き取り調査を行い、それに関連する資料収集を行った。

3-2. 調査の対象と内容

2016年2月及び8月に、樹林子村の10世帯、41人に対して日常生活の中でモンゴル語をどのように使用しているか、彼らがテレビ、携帯電話などのメディアでモンゴル語とどのように接し、そこでモンゴル語がどのように使用されているか、また、子どもの学校の選択、婚姻関係に対する意識について聞き取り調査を行った。ここにその具体的な内容を記し、分析を行う。世帯の選択は、23世帯の中から3世代で共に暮らしている世帯、通学している子どもがいる世帯、家族に漢族がいる世帯という条件を付けて10世帯を抽出し、分析することにした。

3-3. 家庭内におけるモンゴル語の使用状況

まず、この41人のモンゴル語のレベルと日常生活でのモンゴル語の使用状況を調査した。下記の10世帯を「A世帯」～「J世帯」とし、各世帯のモンゴル語の使用状況を調べた(表1～10)。その際、話者がモンゴル語と漢語をそれぞれどの程度使用しているか、その比率を見やすくするため、調査対象者の漢語のレベルをモンゴル語と比較した。

以下の表1～表10には、被調査者のモンゴル語と漢語のレベルについて具体的に、人の話を聞

*8—樹林子村のデジド(78歳)の話(2015年9月)によれば、1943年の5月にペストという伝染病で亡くなった約150人の中にはモンゴル人が多かった。また、60年代の大雨洪水の災難で多くのモンゴル人がジャロード旗へ移動させられた。

*9—2016年2月現在、樹林子村に生まれ育った調査対象30人(漢人2人を除き)の中で、2人(7%)がモンゴル語の読み書きができる。

*10—Sodu, B, 2013, 25～31頁

いてどの程度理解できているか、言語を話すレベルがどうであるか、また、モンゴル文字や漢字の読み書きがどの程度できるかのレベルをそれぞれ「よい」(80%程度)=○、「できる」(50%程度)=△、「少しできる」(20%程度)=▲、「ほとんどできない」(20%以下)=×で表示する。そして、家庭の中で家族に対してモンゴル語で話していることを「→」で示し、家庭の中で相互にモンゴル語で話していることを「⇄」で表す。

また、「蒙」はモンゴル民族を、「漢」は漢民族を、「樹」は出身地の樹林子村を、「他」は他の旗やガチャーを示すもので、「双語」は「モンゴル語」と「漢語」の両言語を意味する。話者が日常生活の中で使用する言語の選択基準は、話者によってどの言語が話やすいかによるものである。

(1) 結果

A 世帯 (4名) の日常生活で使用する言語の状況 (表1)

夫 ⇄ 妻 母親(妻) → 息子, 娘

夫婦の間ではモンゴル語で交流する。娘はモン

ゴル語の簡単な単語が聞き取れ、理解できるが、話せない。息子はモンゴル語がほとんど分からない。妻は漢語が流暢に話せないため、家庭の中での子どもの交流にはモンゴル語か漢語交じりのモンゴル語を使用する機会が多い。しかし、2人の子どもは漢語で返事をする。

妻は1987年にホルチン左翼後旗から樹林子村に嫁いできた。その後彼女は樹林子小学校のモンゴル語の教師、そして、ドゥンミョー・モンゴル族小学校にも教師として勤めていた。1990年代後半からフレイ旗ではガチャーや村の小学校が閉校になったため、妻は六家子鎮の漢族の小学校に勤めるようになり、自分で漢語を学びながら漢語で授業をした。彼女はこの村に来て30年経っているが、現在も漢語で流暢に話せない。

B 世帯 (6名) のモンゴル語のレベルと使用状況 (表2)

父親 ⇄ 母親 ⇄ 夫 ⇄ 妻 ⇄ 孫娘 ⇄ 父親
家族全員 → 孫息子

B 世帯は、母親、夫(息子)、息子の妻、孫息

表1 A 世帯 (4名) の日常生活で使用する言語の状況 (記号などについては本文を参照)

	民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語		
				読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す			
夫	蒙	55	樹	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	双語
妻	蒙	60	他	○	○	○	○	△	△	△	△	△	△	モンゴル語
息子	蒙	30	樹	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	漢語
娘	蒙	25	樹	×	×	▲	×	○	○	△	○	○	○	漢語

表2 B 世帯 (6名) のモンゴル語のレベルと使用状況 (記号などについては本文を参照)

	民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語		
				読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す			
父親	蒙	67	樹	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	双語
母親	蒙	64	他	×	×	○	○	×	×	△	▲	▲	▲	モンゴル語
夫	蒙	41	樹	×	×	○	△	○	○	○	○	○	○	双語
妻	蒙	43	他	○	○	○	○	▲	▲	△	▲	▲	▲	モンゴル語
孫息子	蒙	18	樹	×	×	▲	×	○	○	○	○	○	○	漢語
孫娘	蒙	9	樹	○	○	○	○	▲	▲	△	△	△	△	モンゴル語

子、孫娘の6人家族である。家族間の日常生活におけるモンゴル語の使用状況は、孫息子以外の5人は互いにモンゴル語で交流できる。この中で、母親と妻と孫娘の3人はモンゴル語を使用することが比較的多い。母親と妻はモンゴル人が多い近くのガチャーから嫁いできたモンゴル人で、漢語があまり流暢に話せなかった。また、孫娘はモンゴル族の小学校に通ってからモンゴル語が流暢に話せるようになってきている。モンゴル語が話せる家族5人は孫息子にモンゴル語で話しかけるが、孫息子は簡単な単語しか聞き取れず、モンゴル語では話そうとしない。

C世帯 (6名) のモンゴル語と漢語のレベルと使用する言語の状況 (表3)

母親 ⇄ 父親, 息子の妻, 孫息子
 母親 → 息子, 孫娘

C世帯の日常生活でのモンゴル語の使用状況は、母親が父親と息子の妻と互いにモンゴル語で交流することが多い。息子はモンゴル語が聞き取れ、

理解できるが、ほとんど話さない。孫息子はモンゴル語が聞き取れ、少し話せる。特に、祖母にあたる「母親」と話す時はモンゴル語を使用する。孫娘はモンゴル語が分からない。家族の中で母親は漢語が話せない。母親以外の5人は互いに漢語で交流することが多い。

D世帯 (5名) の家族間で使用する言語の状況 (表4)

父親 ⇄ 夫 ⇄ 妻 母親(妻) ⇄ 長男

D世帯でのモンゴル語の使用状況は、家庭内で父親と息子夫婦の3人の間ではモンゴル語と漢語で交流する。長男はモンゴル語が聞き取れ、理解できるが、あまり話さない。モンゴル語で返事する時は少し考えなければならないので、話すのが苦手なようである。母親(妻)は長男に対してモンゴル語をよく話すが、息子は漢語で返事することが多い。次男は入学する前はモンゴル語でよく話していたが、現在、中学生になった彼はモンゴル語が聞き取れなくなっている。

表3 C世帯(6名)のモンゴル語と漢語のレベルと使用する言語の状況

(記号などについては本文を参照)

民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語	
			読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す		
父親	蒙	76	樹	×	×	○	○	×	×	○	○	双語
母親	蒙	68	他	×	×	○	○	×	×	△	▲	モンゴル語
夫	蒙	39	樹	×	×	○	▲	○	○	○	○	漢語
妻	蒙	41	他	○	○	○	○	△	△	○	○	双語
孫息子	蒙	17	樹	×	×	△	▲	○	○	○	○	漢語
孫娘	蒙	12	樹	×	×	×	×	○	○	○	○	漢語

表4 D世帯(5名)の家族間で使用する言語の状況 (記号などについては本文を参照)

民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語	
			読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す		
父親	蒙	67	樹	×	×	○	○	○	○	○	○	双語
夫	蒙	46	樹	×	×	○	○	○	○	○	○	双語
妻	蒙	42	他	○	○	○	○	△	▲	△	△	双語
孫息子	蒙	21	樹	×	×	△	▲	○	○	○	○	漢語
孫息子	蒙	17	樹	×	×	×	×	○	○	○	○	漢語

E 世帯 (3名) のモンゴル語のレベルと家族間で使用する言語の状況 (表5)

夫 ⇄ 妻 妻 → 息子

E 世帯では妻が漢語で流暢に話せないため、夫婦の間ではモンゴル語で交流することが多い。夫が今までモンゴル語を話し続けてきたのは、妻が漢語で話せないためであった。息子はモンゴル語が少し聞き取れるが、話さない。息子にモンゴル語を覚えさせるため、母親である「妻」がよくモンゴル語で話をするが、答えは漢語の方が多くそうである。

F 世帯 (4名) の家庭内で使用する言語の状況 (表6)

夫 ⇄ 妻 夫妻 ⇄ 息子

F 世帯の夫婦の間ではモンゴル語と漢語で交流する。息子は子どものとき、祖母と一緒に暮らし、よくモンゴル語で話していた。それは、祖母が漢語で話せないためであった。しかし、彼が漢族の学校に入ってからモンゴル語であまり話さなくなっている。両親は息子にモンゴル語を覚えさせるため、モンゴル語で交流するようにしているが、息子の返事は漢語の場合が多い。娘はモンゴル語が分からない。

G 世帯 (3名) のモンゴル語のレベルと家族間での使用状況 (表7)

夫 ⇄ 妻 夫妻 → 息子

G 世帯では妻は漢語があまり話せないため、夫婦の間ではモンゴル語で交流する機会が比較的多い。夫は漢語とモンゴル語の両方が流暢に話せ

表5 E 世帯 (3名) のモンゴル語のレベルと家族間で使用する言語の状況

(記号などについては本文を参照)

民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語		
			読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す			
夫	蒙	50	樹	×	×	○	△	○	○	○	○	○	双語
妻	蒙	50	他	○	○	○	○	▲	▲	△	△		モンゴル語
息子	蒙	24	樹	×	×	▲	×	○	○	○	○		漢語

表6 F 世帯 (4名) の家庭内で使用する言語の状況 (記号などについては本文を参照)

民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語		
			読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す			
夫	蒙	54	樹	×	×	○	○	○	○	○	○		双語
妻	蒙	48	樹	○	○	○	○	○	○	○	○		双語
息子	蒙	24	樹	×	×	△	▲	○	○	○	○		漢語
娘	蒙	12	樹	×	×	×	×	○	○	○	○		漢語

表7 G 世帯 (3名) のモンゴル語のレベルと家族間での使用状況

(記号などについては本文を参照)

民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語		
			読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す			
夫	蒙	68	樹	×	×	○	○	○	○	○	○		双語
妻	蒙	70	他	×	×	○	○	×	×	▲	▲		モンゴル語
息子	蒙	38	樹	×	×	▲	×	○	○	○	○		漢語

る。息子はモンゴル語が少し聞き取れるが、話せない。夫はモンゴル語で教育を受けることができず、「モンゴル人としてモンゴル語で自分の名前さえ書けない」ことが「人生の中でもっとも悔しいことだ」と話す。

H世帯（4名）の家族間で使用する言語の状況（表8）

H世帯は夫、妻、長男、次男の4人家族であるが、家庭内ではモンゴル語を使用していない。夫はモンゴル語が話せる。しかし、妻が漢人で、2人の子どもがモンゴル語が分からないため、家庭内では漢語で交流するしかない。

I世帯（3名）の家族間で使用する言語のレベルと使用状況（表9）

夫 ⇄ 妻

I世帯の長女は入学する前はモンゴル語でよく話していたが、漢族の学校に入学した後モンゴル語が話せなくなった。それに、結婚相手も漢人だったため、現在、モンゴル語を聞き取るのも難しくなった。2016年2月現在、夫、妻、次女の3人家族で、夫婦の間ではモンゴル語で交流することもあるが、比較的少ない。妻は嫁いできたとき、漢語がほとんど話せない状態であったが、現在はモンゴル語と漢語の両方が話せる。次女はモンゴル語が分からない。

J世帯（3名）の日常生活の中で使用する言語の状況（表10）

J世帯は夫、妻、息子の3人家族で、家庭内ではモンゴル語を使用しない。夫はモンゴル語が理解でき、少し話せるが、妻と息子はモンゴル語が分からないため、家庭内でモンゴル語が使用でき

表8 H世帯（4名）の家族間で使用する言語の状況（記号などについては本文を参照）

民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語	
			読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す		
夫	蒙	40代	樹	×	×	○	△	○	○	○	○	漢語
妻	漢	40代	樹	×	×	×	×	○	○	○	○	双語
長男	蒙	17	樹	×	×	×	×	○	○	○	○	漢語
次男	蒙	3	樹	×	×	×	×	×	×	○	○	漢語

表9 I世帯（3名）の家族間で使用する言語のレベルと使用状況

（記号などについては本文を参照）

民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語	
			読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す		
夫	蒙	52	樹	×	×	△	▲	○	○	○	○	双語
妻	蒙	49	他	○	○	○	○	▲	▲	○	○	双語
次女	蒙	19	樹	×	×	×	×	○	○	○	○	漢語

表10 J世帯（3名）の日常生活の中で使用する言語の状況

（記号などについては本文を参照）

民族	年齢	出身地	モンゴル語のレベル				漢語のレベル				日常使用する言語	
			読む	書く	聞く	話す	読む	書く	聞く	話す		
夫	蒙	46	樹	×	×	△	▲	○	○	○	○	漢語
妻	漢	44	樹	×	×	×	×	○	○	○	○	漢語
息子	蒙	22	樹	×	×	×	×	○	○	○	○	漢語

ない。

以上、A～J世帯の家庭内でのモンゴル語および漢語の使用状況について記述した。

(2) 分析

ここでは、(1)で述べたA～J世帯の家庭内でのモンゴル語使用状況に基づき、被調査者41人のモンゴル語のレベルについて分析する。まず、モンゴル語のレベルを男女別に図5に示す。

図5における分析の結果は以下の通りである。モンゴル語がよく聞き取れる人は22人で、全体の54%を占める。男女別はそれぞれ11人である。

一方、モンゴル語がよく話せる人は18人で、全体の44%を占める。男女別は、男性が7人で、男性全員(24人)の29%を、女性が11人で、女性全員(17人)の65%を占めている。

モンゴル語で読み書きがよくできる人は8人で、全体の20%を占める。この8人はすべて女性で、樹林子村に生まれ育ったのは2人だけである。

これに対し、被調査者の80%を占める33人がモンゴル語の読み書きができない。男女別は男性24人(全員)、女性9人(漢人2人を含む)で、彼らはすべて樹林子村に生まれ育った人である。

以上の分析内容をまとめれば、被調査者41人

中で、モンゴル語がよく聞き取れるのは54%で、モンゴル語でよく話せるのは44%である。これに対し、モンゴル語で読み書きができるのは20%に過ぎない。

男女別で見れば、モンゴル語が話せる人の中には男性7人(29%)で、女性11人(65%)で、女性の割合が男性の割合の2.2倍にもなっている。読み書きができる人はすべて女性である。それは、男性たちは全員樹林子村の生まれ育ちで、彼らの中にモンゴル語で学校教育を受けた人がほとんどいないからである。このように、樹林子村に生まれ育ったモンゴル人たちの中で、モンゴル語を母語としている人は少ない。また、村におけるモンゴル語は半数にも満たない話者たちの話したことばにより維持されている。そのため、樹林子村においてモンゴル語は消滅に直面する「危機言語」とあると言える。「危機言語」とは一般的に存続の危機に直面している言語を指すが、本稿での「危機言語」はフレイ旗樹林子村において母語話者が少ない、第一世代と第二世代の数少ない話者たちの話したことばにより維持され、第三世代の若者と子どもたちの中で聞き取れる人も少ないモンゴル語を指す意味で使われるものである。

次に、被調査者たちのモンゴル語の「話す能力」、

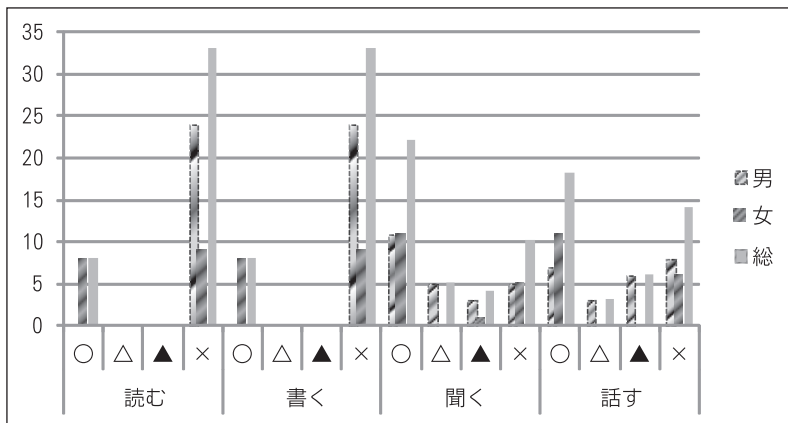


図5 被調査者41名のモンゴル語のレベル (男女別)
記号などについては本文を参照。単位：人

表 11 被調査者 41 名のモンゴル語の「話す能力」(年齢別)

	単位：人	
	よく話せる人	話せない人
60 歳以上	8	
40～59 歳	9	
30～39 歳		2
20～29 歳		3
10～19 歳		6
10 歳以下	1	1
人数 (全)	18	12
割合	44%	29%

表 12 被調査者 41 名のモンゴル語の「聞く能力」(年齢別)

	単位：人	
	よく聞き取れる人	聞き取れない人
60 歳以上	8	
40～59 歳	12	2
30～39 歳	1	
20～29 歳		1
10～19 歳		6
10 歳以下	1	1
人数 (全)	22	10
割合	54%	24%

表 13 樹林子村における若者と子どものモンゴル語のレベル (記号については本文を参照)

単位：人

	世帯-年齢	A-25	B-18	B-9	C-17	C-12	D-21	D-17	E-24	F-24	F-12	H-17	H-3	I-19	J-22	14 人の中
読む				○												○1 人
書く				○												○1 人
聞く		▲	▲	○	△		△		▲	△						○1 人, △3 人, ▲3 人
話す				○	▲		▲			▲						○1 人, ▲3 人

「聞く能力」について年齢別に分析する。まず、「話す能力」の中で、よく話せる人と話せない人の割合を年齢別に表 11 に示し、分析する。

表 11 ではモンゴル語がよく話せる 18 人の中で年齢が 40 歳以上の人が 17 人で、40 歳以上の 24 人の 71% を、40 歳未満の人は 1 人のみで、40 歳未満の 17 人の 6% を占める。

これに対し、モンゴル語が話せない 12 人（漢人 2 を除く）はすべて 40 歳未満で、17 人の中で 71% を占めている。その中で 10 歳以下の人は 1 人、10～19 歳の方は 6 人で、17 人中でそれぞれ 6% と 35% を占める。そして、20～29 歳の方は 3 人で、17 人中 18% を占め、30～39 歳の間の人は 2 人で、17 人中 12% を占める。

このように、ここでは 10 歳以下の 1 人を除き、若いほどモンゴル語が話せない傾向が見られる。

次に、モンゴル語の「聞く能力」の中で、よく聞き取れる人と聞き取れない人の割合を年齢別に表 12 に示し、分析する。

表 12 に見られるように、樹林子村のモンゴル人の中ではモンゴル語がよく聞き取れる人は 22 人である。その中で 20 人が 40 歳以上で、40 歳以上の 24 人中 83% を占め、40 歳未満の人は 2 人で、40 歳未満 17 人中 10% しか占めてない。

これに対し、モンゴル語が聞き取れない 8 人（40 歳以上の漢人 2 人を除き）は年齢層が 40 歳未満で、17 人中 47% を占める。特に、10～29 歳の子どもと若者の中でモンゴル語が聞き取れる人がいないのに対し、聞き取れないのは 7 人であり、17 人中 41% を占めている。

このように、モンゴル語が聞き取れないのはすべて 30 歳以下（2 人の漢人を除く）の若者と子どもである。

以上の分析に基づき、30 歳以下の若者と子ども 14 人のモンゴル語のレベルについて表 13 にまとめる。

表 13 に示された通り、若者と子ども 14 人の中でモンゴル語が聞き取れ、話せ、また、読み書き

もよくできるのはB世帯の9歳の子ども1人だけである。この1人を除き、モンゴル語が「少し聞き取れる」、「聞き取れる」、「少し話せる」人はそれぞれ3人いるが、モンゴル語が「よく聞き取れる」、「よく話せる」人と「読み書きができる」人はいない。このように、モンゴル語の未来を担う若者と子どもの中でモンゴル語の読み書きができる人はほとんどいないこと、モンゴル語が聞き取れ、話せる人も非常に少ないことがこの村の現状である。そのため、樹林子村におけるモンゴル語の存続の状況は極めて深刻であると言える。

3-4. モンゴル語に与えるメディアの影響

ここでいう「メディア」は家庭内に使用されているテレビやラジオ、携帯電話などを指す。

(1) テレビの影響

中国社会の大きな変化により、テレビのモンゴル語放送の番組も多様化し、生活、健康、社会、法律、娯楽など日常生活の中で欠かせない内容が組まれるようになってきている。このようなテレビ番組は樹林子村のモンゴル人たちにどのような娯楽を与え、言語生活にどのような影響を与えているか、聞き取り調査によって把握した状況を表14に示す。

ここでは村の人たちの話に基づき、よく見ているモンゴル語放送の番組を「モンゴルの歌」(Mongyl dayuu)、「ウルゲル(物語)」(Uliger)、「ドラマ」(Jüjüge)、「その他」(Busud)に分類した。「その他」には「社会観察」(Neyigem-ün

ajıylalta)、「生活の友」(Amidural-un qani)、「法律の先導者」(Qauli-yin kötölegçi)、「医学について」(Emnelge-yin tuqai)など番組が含まれる。

表14に示すように、この村では10世帯の中でモンゴル語放送の視聴者がいないH世帯とJ世帯の2世帯に対し、8世帯にそれぞれモンゴル語放送の番組を視聴している視聴者がいる。視聴している内容の中でもっとも多いのは「モンゴルの歌」で、その次は「その他」である。そして、「その他」の中では「社会観察」、「生活の友」、「法律の先導者」、「医学について」の順でよく見るようである。この順列は村のモンゴル人たちの話により示したものである。

なぜこれらの番組を見るのか。村のモンゴル人たちの話によれば、近年、通遼市のテレビ放送局にモンゴル語チャンネルが設けられたため、モンゴル語の歌やウルゲルなどの番組の放送が多くなり、古い民謡や流行の歌をたくさん聞くことができるようになった。その中で、特に、現地のモンゴル人たちは出身地であるホルチンの民謡が好きで、通遼市のモンゴル語放送ではホルチン民謡のコンクールが多く行われ、この村のモンゴル人たちはそれをよく視聴している。

「その他」の番組は生活、社会、健康など身近なことに関わりがあり、文字が読めなくても聞いてほとんど理解できる。

調査対象者の中でモンゴル語のテレビドラマを見ているのは1人だけであった。それは、ドラマのモンゴル語が標準語に近いことばで、村のモン

表14 村人たちのモンゴル語放送を視聴している状況(世帯別)

	A世帯	B世帯	C世帯	D世帯	E世帯	F世帯	G世帯	H世帯	I世帯	J世帯
モンゴルの歌	夫婦	両親と息子の妻	両親と息子の妻	両親と息子の妻	夫婦	妻	夫婦		妻	
その他	夫婦	両親と息子の妻	両親と息子の妻		夫婦		夫婦			
ウルゲル	夫婦	両親と息子の妻				妻	夫婦			
ドラマ	夫婦		息子の妻							

ゴル人の多くが標準的なモンゴル語をよく理解できないからであった。

この村でモンゴル語のテレビ放送を視聴している17人のすべてが40歳以上である。それは40歳以上（調査対象者41人中24人が40歳以上）の話者の71%を占める。このように、ここで40歳以上の7割の人が日常生活の中でモンゴル語のテレビ放送を通してモンゴル語と接触し、積極的にモンゴル語を聞き、話すようにしている。それがこの村でモンゴル語を維持する上で重要な役割を果たしていると考えられる。それに対し、40歳未満の若者と子どもの中ではモンゴル語のテレビ放送を視聴している人がいない。

(2) 携帯電話の影響

樹林子村におけるモンゴル語の使用状況についての調査では、親戚、友人、知り合いと電話で連絡する時、モンゴル語で話しているか、モンゴル語をどういう場合に使用しているかについても聞き取り調査を行った。

この村のモンゴル人の家庭では、高校生と大学生で携帯電話を持っている人が多かった。それは、近年、高校の受験を申し込む時、学校側からインターネットにつながりやすい新しいタイプの携帯電話の購入が要求されるようになってきているからである。それに対し、年配の人たちは携帯電話を持っていないか、あるいは、古いタイプの携帯電話しか持っていない人が多かった。特に、3世代で共に暮らしている家庭では第一世代の人の中で携帯電話を持っている人が少なかった。古いタイプの携帯電話は電話とショートメールのみでき、現在流行のWeChat*11が使えない。

新しいタイプの携帯電話を使用してから、友人（モンゴル人が多い）、親戚（特に妻の親戚）と連絡する際にモンゴル語を使用することが以前より多

くなった。その前は電話代が高かったため会って話すことが多かったが、交通の便の悪さや経済的な事情により、会う機会が限られていた。近年は新しいタイプの携帯電話が普及し、電話代も安くなり、電話は使用しやすくなった。さらに、最近は無料でWeChatなどが使用できるようになったことから、モンゴル語で話す機会が多くなっている。WeChatは経済的で、直接話して録音が残せるという意味で便利なので、子どもたちも親戚とWeChatを利用し、モンゴル語で挨拶するようになっている。

以上のような状況から見れば、新しいタイプの携帯電話、特にWeChatは樹林子村のモンゴル人たちに、モンゴル語に接触し、モンゴル語で話す機会をより多く与え、それが話ことばのみによって維持されている樹林子村におけるモンゴル語の維持に重要な役割を果たしているのではないかと考えられる。

3-5. 民族教育とモンゴル文化に対する態度

(1) 子供の教育と未来に対する態度

樹林子村のモンゴル人たちが子どもの学校の選択、未来についてどう考えているかを把握するため、本調査ではモンゴル語とモンゴル民族教育に関する以下の質問事項（問①～③）を設けて親たちに聞き取り調査を行った。

- ①子どもがモンゴル語で話せるか。
- ②子どもにモンゴル語を教えるため、モンゴル族の学校に行かせようと考えたか。
- ③子どもにモンゴル語を覚えさせるために工夫をしているか。

回答は以下の通りである。

問①の回答：B世帯では孫娘が小学校に入るまでモンゴル語を一言も話せなかったが、モンゴル

*11—WeChatとは中国大手IT企業テンセンが作った無料インスタントメッセージングアプリである。ショートメールや録音ができる。

民族学校に通ってからモンゴル語が流暢に話せるようになった。C, D, Fの3世帯では、それぞれの長男がモンゴル語で少し話せる。D世帯の次男は学校に入る前はモンゴル語でよく話していたが、現在は全く話せなくなった。

問②の回答：A世帯、D～G世帯の5つの家族は親が自分の子どもたちをモンゴル族学校に行かせたかった。しかし、近所に学校がないなど、不便だったため行かせなかった。

B世帯では祖母と母親が祖父の意見に反対し、孫娘をモンゴル民族学校に行かせた。

C世帯では祖母と祖父が2人の孫のうち1人でもいいから、モンゴル民族学校に行かせたかったが、子どもの両親は子どもを40キロ離れているモンゴル民族学校に行かせる場合に必要とする送迎（週に一回）費など経済的事情や交通の便を考え、2人の子どもを共に10キロ離れている漢族の学校に行かせた。

I世帯の親は、子どもの学校教育は何語で行ってもよいと考え、モンゴル語で教育を受けさせようとは特に考えなかった。

H世帯の親は、漢語で教育を受けさせることが子どもに有利であると考えていた。モンゴル語が社会であまり使われないので、モンゴル語を学んでも使い道が狭い。そのため、出世さえできれば漢語で教育を受けてもよいと話していた。

J世帯の夫は、自分がモンゴル語を知っていても使わない。子どももモンゴル語が分からないので、子どもの教育はどの言語で受けてもよいと考え、特に、モンゴル語で受けさせたいとは思っていなかった。

問③の回答：D～Fの3世帯の親は、子どもに少しでもモンゴル語を覚えさせようとし、日常生活でモンゴル語を使って交流するため、一緒にいる時はなるべくモンゴル語で話かけている。子どもが学校や仕事に行くなど家を離れている時は電話でモンゴル語を話すように工夫している。

このように、子どもたちをモンゴル民族学校に行かせたかった親、あるいは、子どもたちにモンゴル語を覚えさせるために工夫している親の方が、漢語を学ばせる方が子供に有利であるとする親より多い。これは、この村のモンゴル人たちの多くがモンゴル語、モンゴル文化に対して強い愛着をもっていることを示すものである。

(2) 結婚相手の選択

樹林子村のモンゴル人は長年漢人と共に生活してきたため、漢人と結婚する人が多いと考えられていた。しかし、現地調査により現状を把握した結果はそうではなかった。調査の対象となった10世帯の中では妻が漢人であるのは2世帯(20%)だけであった。それに対し、妻がモンゴル人であるのは8世帯(80%)で、その中で樹林子村に生まれ育ったのは1人だけであった。この村の男性たちはなぜ結婚相手をモンゴル人にするのか、それについて聞き取り調査をした結果をまとめると以下ようになる。

この村のモンゴル人たちは長年漢人と共に暮らし、日常生活の外見から見ると漢人とそれほど差が見られないが、実際、生活習慣や文化、人の性格などが漢人と異なることが多い。また、結婚相手をモンゴル人にすればことばが通じ、生活習慣も同様であるので生活しやすいと考える親の意見と希望があり、子どもは親の意見を尊重しなければならないと考えるからである。男性自身もモンゴル人の女性は朴素で、穏やかで、勤勉であると考え、モンゴル人女性を好む。樹林子村はモンゴル人が多いマンハン・ソムと隣接しているため、この村の男性たちはモンゴル人女性と知り合う機会が比較的多い。結婚相手と知り合う方法としては、自分で見つけるか、親戚や友人に頼んで紹介してもらう。女性側からも知り合うことを求めてくることがある。

(3) なぜモンゴル人女性は樹林子村に嫁いで来るのか

この村のモンゴル人妻たちに、なぜこの村に嫁いできたのか、調べてみた。その回答によれば、まず、モンゴル人の中には娘が漢人と結婚することに強く反対する親が多いため、モンゴル人女性には漢人と結婚する人が少ない。モンゴル人の女性たち自身も漢人男性とはことばや生活習慣、性格などが合わないため、一緒に生活することを考えない人が多い。それに対し、女性にとってもこの村のモンゴル人男性は、勤勉さでも漢人に劣らず、生活が計画的で、モンゴル人という意味で正直で、また、ことばや生活習慣、性格なども互いに理解されやすいと考えられている。また、樹林子村は土地が肥沃で農業に適し、隣接している他のガチャーや村より生活しやすいため、親戚や友人の紹介でこの村に嫁いでくる人が多い。

以上、親たちの子どもの教育、子どもの未来に対する態度、結婚相手の選択状況などから、樹林子村におけるモンゴル人たちのモンゴル語、モンゴル文化に対する意識について考察した。その中には、この村におけるモンゴル人のモンゴル語とモンゴル文化に対する強い愛着がみとれる。これらがこの村にとってモンゴル語を維持する上で大事な役割を果たしているのではないかと考えられる。なぜならば、家族の中で親が一人、特に母親が漢人である場合、子どもたちが漢語を第一言語にし、漢民族の学校に通うようになるため、家庭の中でもモンゴル語が使えなくなってしまうからである。その例として、H世帯とJ世帯の場合を見ることができる。この2世帯では妻が漢人であるため、家庭内での交流は漢語だけで行われ、子どもたちはモンゴル語がまったく話せない。

4. 考 察

2016年2月と8月の間にフレー旗樹林子村で行った現地調査により、この村におけるモンゴル

人10世帯、41人が日常生活の中で使用しているモンゴル語の現況を把握することができた。

第一に、この村のモンゴル語の使用状況を調査し、分析した結果、この村に生まれ育ったモンゴル語話者たちの多くが教育において漢語を第一言語としたため、モンゴル民族学校で教育を受けた人がほとんどいないことが明らかになった。そのため、この村に生まれ育ったモンゴル人の中でモンゴル語の読み書きができる人はほとんどいなく、樹林子村におけるモンゴル語は事実上、話しことばのみによって維持され、存続の危機に直面していることが判明された。

第二に、この村ではモンゴル語が聞き取れ、話せるのは40歳以上の話者たちであった。それに対し、40歳未満、特に30歳以下の若者と子どもの中でモンゴル語が話せ、聞き取れ、理解できる人は非常に少ない。そして、年齢が若いほどモンゴル語が理解でき、モンゴル語で話す人が少なくなっている。これにより、樹林子村におけるモンゴル語を消滅の危険に直面している「危機言語」であると言える。

一方、第三点として、樹林子村のモンゴル人たちは、近年、特に40歳以上の人たちの中で7割の人がモンゴル語のテレビ番組を視聴し、積極的にモンゴル語を聞き、モンゴル語で話していることが示された。また、年配の人たちを除き、彼らは携帯電話によるWeChatのグループなどを通して、より広い範囲で多くの人とモンゴル語で話せるようになってきている。若者と子どもの中にはモンゴル語のテレビ番組を視聴している人がいないが、子どもたちの中でWeChatを通じて親戚とモンゴル語で挨拶するようになってきている人もいる。このような現状により、テレビと携帯電話は樹林子村のモンゴル人たちにモンゴル語で接触する機会をより多く与え、この村におけるモンゴル語の維持に欠かせない重要な役割を果たしている。

第四に、樹林子村の付近にモンゴル民族学校が

ないなど不便な状況の中で、村人たちは子どもたちにモンゴル語を覚えさせるための工夫をしていた。また、結婚相手の選択においても村人たちのモンゴル語とモンゴル文化に対する強い愛着が観察された。

今後の研究課題として、フレー旗では樹林子村の次にモンゴル人が少ないガチャーの一つである六家子鎮のマルツール・ガチャーのモンゴル人の生活に密着し、現地調査を行う。そして、このガチャーにおけるモンゴル語の社会的状況、モンゴル語の教育について、また、モンゴル人たちのモンゴル語の習得と使用状況を把握し、分析する。それにより、マルツール・ガチャーのモンゴル人たちの言語生活の実態を明らかにするとともに、今回の結果とも比較し、地域の「危機言語」としてのモンゴル語の使用状況を明らかにしたい。

参考文献

〔日本語文献〕

- アルタンガラグ (2011) 20 世紀におけるモンゴル人の
 牧畜環境—ノーン (嫩江) ホルチン地域を中心に、
 吉田順一「モンゴル史研究—現状と展望」, 早稲田大
 学モンゴル研究所 明石書店, 378-394.
- アルタンホール (2016) 内モンゴル自治区東部フレ
 ー旗におけるモンゴル語の現状—言語生活の社会的
 背景—, 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要,
 25, 99-112.
- オウエン・ラテイモア (1934) 「満洲国に於ける蒙古民
 族」(後藤富雄訳), 善隣協会.
- 岡田樹編 (2007) 「モンゴルの環境と変容する社会」,
 (東北アジア研究センター叢書 第 27 号) 東北大学
 東北アジア研究センター.
- 中見立夫 (2007) 内モンゴル東部という空間—東アジ
 ア国際関係の視点から, モンゴル研究所編「近現
 代内モンゴル東部の変容」(アジア地域文化叢書 8),
 雄山閣, 21-46.
- フフバートル (2002) 内モンゴルにおける現代モン
 ゴル語研究の問題と課題, モンゴル研究論集, 6, 東北
 大学東北研究センター, 145-151.

- フフバートル (2007) ことばの変容からみた『東モン
 ゴル』—内モンゴルの言語合と東部方言, モンゴル
 研究所編「近代内モンゴル東部の変容」(アジア地域
 文化叢書 8), 雄山閣, 346-371.
- ボルジギン・ブレンサイン (2003) 「近現代におけるモ
 ンゴル人農耕村落社会の形成」, 風間書房.
- ボルジギン・ブレンサイン (2009) 中国東北三省のモ
 ンゴル人世界, ユ・ヒョジョン, ボルジギン・ブ
 レンサイン編著「境界に生きるモンゴル世界—20 世紀
 における民族と国家」, 八月書館.
- ボルジギン・ブレンサイン (2011) 近代におけるモン
 ゴル社会の構造変動と社会史の可能性, 「モンゴル史
 研究現状と展望」, 早稲田大学モンゴル研究所.
- ボルジギン・ブレンサイン (2013) アフロ・ユーラシ
 ア内陸乾燥地文明研究 叢書 6 「多様化するモンゴル
 世界 1」『モンゴル東部地域における定住と農耕化の
 足跡』, 名古屋大学文学研究科比較人文学研究室.
- 吉田順一 (2007a) 近現代内モンゴル東部とその地域の
 文化, モンゴル研究所編「近現代内モンゴル東部の
 変容」(アジア地域文化叢書 8), 雄山閣, 3-20.
- 吉田順一 (2007b) 内モンゴル東部における伝統農耕と
 漢式農耕の受容, モンゴル研究所編「近現代内モン
 ゴル東部の変容」(アジア地域文化叢書 8), 雄山閣,
 272-294.
- 〔モンゴル語文献〕
- Bayančoγtu, 2002, *Qorčïn aman ayalun-u sudulal*,
 Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün
 qoriy-a.
- Bayančoγtu, 2007, *Nutuγ-un ayalun-u sinjilel*, Öbür
 mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a.
- Dedge, Qayırqan. Γ, Sodu. B, Erdemtü, 2001, *Qorčïn
 aman ayalu ba orun nutuγ-un soyul sudulal*,
 Liyouning-un Ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a.
- Erdeničuyla, 2010, “Mongγul kele bičig-ün kereglege
 jiči sayijirayulqu arγ-a jam-un tuqai”, *Tüngliya
 ajil mergejil-ün degedü surγayuli-yin erdem
 šinjilegen-ü sedgül*.
- Qurča, Čangming, 2001, *Qorčïn tobčiyān*, Ündüsüten-
 ü keblel-ün qoriy-a.
- Qayırqan. Γ, Sodu. B, 2002, *Mongγul kele hiked
 mongγulčud-un ulamjilaltu soyul*, Öbür mongγul-

- un suryan kümüjil-ün keble-ün qoriy-a
- Kürelša, 2015 *Küriy-e teüke soyul-un domuy-un čomurliy*, Öbür mongγul-un keblel-ün bülüglegel, Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a.
- Kürelša, 2015, *Küriy-e burqan šasin-u tobčiy-a*, Öbür mongγul-un keblel-ün bülüglegel, Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a.
- Süke. B, 2010, *Andai-yin nutuy küriy-e qosiyun-u teüke soyul-un tobčiy-a*, Öbür mongγul-un keblel-ün bülüglegel, Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a.
- Sodu. B, 2013, *Küriy-e mongγul kele aman yariy-a sudulul*, Öbür mongγul-un keblel-ün bülüglegel, Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a
- Šuwang šan, 2013, “Qorčün qaračün ayalyu ba tariyalaqu soyul”, Öbür mongγul-un jегün keseg-ün mongγul kelen-ü nutuy-un ayalyun-u bürüldül-ün neyigem teüke-yin aqui orčün 「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究」第6名古屋大学文学研究科比較人文学研究室
- Tianfeng, Kürelša, 2013, *Küriy-e yačar-un ner-e-yin soyul sudulul*, Öbür mongγul-un keblel-ün bülüglegel, Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a.
- Toγuy-a, 1992, “Küriy-e qosiyun-u mongγul kele ayalyun-u tuqai temdeglel”, *Mongγul-un sudulul* 1 düger quyučay-a.
- Wangjil. B, 1998, *Mongγul ündüsüten-ü ulamjilaltu tariyalang*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-un qoriy-a.
- Yuan čao, 1981, “Mongγul kelen-ü küriy-e qosiyun-u yariyan-u egesig bolun bičig-ün kelen-ü abiy-an-u qaričayulul”, *Mongγul kele udq-a joqiyal-un sinjilegen* (dotuyadu sedgül), Öbür mongγul-un ündüsüten-ü bayisi-yin dededü suryaγuli-yin mongγul kelen-ü salburu.
- Yuan čao, 1985, “Mongγul kelen-ü küriy-e qosiyun-u yariyan-u abiy-a kiged tegün-i dürimjigülkü tuqai”, *Öbür mongγul-un ündüsüten-ü bayisi-yin dededü suryaγuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül*, Neyigem-ün sijilekü uqayan-u mongγul keblel.
- Yüng lan, Sodu. B, 2010, “Küriy-e qosiyun-u mongγulčud-un kele yariyan-u jarim ončaliγ-un tuqai” *Öbür mongγul-un ündüsüten-ü yeke suryaγuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül*, Neyigem-ün sijilekü uqayan-u mongγul keblel
- Zhiming. Bao, 1999, *Qorčün-u mongγul tariyačün-u amidural*, Liyouning-un ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a.

〔中国語文献〕

- 包福舜 (2005) 『库伦旗志』内蒙古文化出版社巴・蘇和
- (2013) 『傳奇的庫倫文化』内蒙古文化出版社
- 宝音孟和 (2015) 『庫倫旗各段階民族教育發展狀況』庫倫旗教育局
- 呼日勒沙 (2007) 『草原文化区域分布研究』内蒙古教育出版社
- 朋・乌恩 (2007) 『蒙古族文化研究』内蒙古教育出版社
- 乔子良 (2008) 『科尔沁史话』内蒙古人民出版社
- 中国人民政治協商会議庫倫旗委员会文史資料編委会 (2015) 『庫倫旗文史資料』
- 曹道巴特爾 (2007) 『喀喇沁蒙古语研究』民族出版社
- 曹永年 (2009) 『内蒙古通史第三卷』内蒙古大学出版社
- 曹道巴特爾 (2013) 「全球化与中国蒙古語」『蒙古语族语言与地域文化研究论文提要集』内蒙古民族大学出版社 319~336 頁

(アルタンホェール 生活機構学専攻3年)

受理年月日 平成28年9月30日

審査終了日 平成28年12月15日